

そこが聞きたい ハゲタカジャーナル

さまざまな審査で学術論文をインターネットに掲載する粗悪学術誌「ハゲタカジャーナル」が急増している。科学的に不正確な内容が世に広まる危険があるが、国や学術界は対応に消極的だ。科学者の代表機関・日本学術会議の元会長で、科学技術政策に詳しい黒川清・東京大名誉教授(82)に問題点や解決策を聞いた。
【聞き手・島井真平、写真・長谷川直亮】

「ハゲタカ誌が世界中で急増しています。」

ネットの普及に伴い、世界中でネット専用の学術誌が増えました。研究者が成果を発表できる場が増えたという意味では悪いことではありません。出版社が新たに学術誌を作ることには自由ですが、有象無象の学術誌が数を把握できないほど出てきてしまいました。

その中の一部は、営利目的に走った出版社が、質は二の次で内容を問わずに論文を掲載してしまっています。「査読」を「2」をしている」といった「ハゲタカ誌」を出版し、研究者に投稿を募り、掲載料として、研究費を狙う意図的な不正ビジネスと言えます。読み手も、厳しい査読を通過した論文であると思われ、まづ可能性があり、研究の質の悪いものが増えています。間違った情報を流すフレイクニュースと同様、深刻な問題です。

研究者がハゲタカ誌を利用してしまっているのはなぜでしょうか。
研究者の業績は、学術誌に掲載された論文数や他の研究者に内容が引用された数で評価されます。科学研究の世界には「パブリッシュ・オア・ペリッシュ」(論

元日本学術会議会長

黒川 清氏



くろかわ・きよし
1962年東京大医学部卒。東大名誉教授、政策研究大学院大名誉教授。2003、06年に日本学術会議会長を務め、東京電力福島第一原発の国会事故調査委員会委員長なども歴任した。

無意味なアリバイ作り

文を出せ、さもなげは去れ」という言葉があるほどです。また、論文を世界の人に読んでもらうには、英文の国際誌に投稿する必要があります。業績を求め、国際誌のハゲタカ誌を利用する研究者が増えている背景には、途下国が経済発展し、科学研究に参加する研究者数が世界的に増加していることがあるのではないのでしょうか。参加者が増えれば、それに比例して学術誌に掲載される論文も増えます。

多くの研究者は、学術誌のランクを示す指標「インパクト・ファクター」が高い英科学誌ネイチャーや米科学誌サイエンスなど有名誌への論文掲載を目指します。研究者の総数が増えれば、評価の高い学術誌への掲載は高レベルの競争となります。論文を出したい研究者は、有名誌に比べて掲載のハードルが低い学術誌を探し、ハゲタカ誌に投稿するケースもあると考えられます。研究倫理よりも論文掲載を重視してしまい、簡単に業績が得られることに味を占めてしまつたのでし

よう。研究を評価する大学など研究機関側は業績にハゲタカ誌がまぎれていないか注意が必要です。

「研究者が置かれている環境も影響しているのでしょうか。」

2004年に国立大が法人化され、国は大学の基礎経費に当たる運営費交付金を年1割ずつ削減しています。このため、研究者の正規雇用のポストが減りました。特に30、40代の研究者にむけて来ている任期付き雇用が増えています。彼らは限られた時間で結果を出さないといけない状況に置かれています。

さらに、国の審査を受けて研究費を獲得する競争的資金の比重が増え、国から資金を得た場合は研究した証拠を残す必要があります。「ここにかく論文を載せた」と考え、お金を払えば論文が掲載されるハゲタカ誌に投稿する場合もあるでしょう。しかし、ハゲタカ誌に掲載され

1 ハゲタカジャーナル
審査が不十分だったり、無許可で著名研究者を編集委員があるインターネット専用学術誌。料金を払えば論文を掲載できる例が多い。論文発表の実績を増やしたい研究者を狙う様子から、日本では、動物の死肉を主食とするハゲタカを専門家が呼称に使い、問題提起した。掲載された論文が健康食品などの宣伝に利用されることもある。

2 査読
投稿論文の掲載を認めるか、出版社側が行う審査。専門分野に近い複数の研究者が担当し、論文の内容が妥当かなどを判断する。疑問点があれば再審査が繰り返され、不採用となる場合もある。

「ハゲタカ誌への投稿を減らすためには何が必要ですか。」

研究室では、教授などの責任者が若い研究者や学生を指導し、論文の投稿先を決めます。したがって、指導者がハゲタカ誌の存在を認識することが重要です。研究者が投稿先にハゲタカ誌を選んで相談に来た場合は、指導者がストップをかける必要があります。逆に、指導者がハゲタカ誌に投稿しようとした場合、若い研究者は「そこに投稿するのはやめた方がいい」とは言えないでしょう。

しかし、ハゲタカ誌に論文が掲載されてしまつと、研究者の経歴に傷が残ってしまいます。やはり、指導者は次世代の研究者がまともな学術誌に論文を投稿するよう育てるべきです。博士号を学生に授与した時、指導者は対外的に「研究者になる資格を与えた責任者」と見られます。博士号を授与された研究者に論文の書き方や研究の進め方などを教えたのは指導者です。指導者自身も周りから評価されていることを忘れてはいけません。

「この問題に対して、国や学術界に目立った動きが見られません。」
日本の学術界全体で「ハゲタカ誌に論文を投稿するのはやめた」と共通の意識を持つ必要があります。そのためには、まず東京大や京都大などの日本を代表する国立大が、米国の研究者が作ったハゲタカ誌のリストなどを使い、どのような学術誌がハゲタカ誌に該当するかを組織として認識し、全研究者に警告すべきです。
米科学誌サイエンスに今年8月、研究不正による論文撤回数が多い研究者の世界トップ10のうち、半数を日本人が占めたという記事が載りました。日本は「研究不正大国」になってしまつていて、こうした事態も考慮し、関係者がハゲタカ誌の対策を考えるべきで、日本学術会議や国立大学協会、研究費を助成する日本学術振興会なども研究者に向けて、どうすればいいのか何らかのアナウンスや指導をしなくてはなりません。それが社会に対して学術界が果たすべき責任です。

聞いて一言

「日本の研究者は出版社の力にまかされているんだよ」。本来はハゲタカ誌への投稿にストップをかけるべき研究室の責任者が、投稿に許可を出している状況を、黒川さんは厳しく批判した。その口調に、指導者の認識不足に対する危機感を感じた。「研究倫理よりも論文掲載を重視している」との指摘も、学術界の根幹部分に揺らぎが生じているという印象を持った。ネットの普及で学術論文を取り巻く環境は急激に変化している。国や主要な学術団体の対応力が問われている。